

hgm012-00183

通し番号：5

病院総合医のためのPOCUS(Point of care ultrasound) ～基本から応用まで～

○山田 徹

東京医科歯科大学大学院 総合診療医学分野

Point of care Ultrasound(POCUS)は1990年代に生まれて欧米を中心に発展してきた、超音波検査手技についてのコンセプトである。もともとは循環器内科医など各専門科の専門領域であった超音波検査を、質を担保した上でベッドサイドで主治医自らが行えるようにという目的で開発されてきた。主に救急や集中治療領域で発展してきたが、今日ではHospitalist（病院総合医）にも必須のスキルとなってきており、また米国では学生教育にも導入されている。日本ではもともと救急外来や病棟で主治医自らが超音波検査を行うことは珍しくなかったためPOCUSのコンセプトが普及するのは遅れていたが、私がPOCUSを初めて学んだ約10年前と比較すると、最近では著しく普及してきていることを実感する。POCUSは上述の通りコンセプト名であり、特定の手技を指す名称ではない。POCUSには心エコーや肺エコー、また救急でのEFASTやRUSHも含まれる。どれも汎用性を考慮して端的にまとめられてはいるが、それぞれを学ぶためにはレクチャーだけでも1項目あたり1時間程度は要する。今回はこの1セッションで、心エコー(FOCUS: Focused cardiac ultrasound)、肺エコー、下肢血管エコーについて、基本から応用までベッドサイドで使用する上でのポイントを絞って概説する。